

幼兒の心理的發達 (二)

山 下 俊 郎

一一 二歳兒の發達的特質

乳幼兒の心理的發達の段階を分ける場合、ふつうは滿一歳までを乳幼兒期と呼ぶ事が多いが、學者によつては滿二歳までを嬰兒期と名づけてゐるひともある。前に述べたように、子供は一歳から二歳の間に自分の身體を何處へでも自由に運ぶ事が出来るようになるので、この意味に於て、二歳になると、運動殊に自分の身體を移動させる全身的な運動の力を充分に身につけるようになった譯で、發達の上から考えて、一つの區切り目に來てゐると考えられるからである。或るアメリカの學者は二歳兒を「走りまわる子供」running childと呼んでゐるが、この意味から言つてうなづける呼び名であるといえる。このようなことを念頭に置きながら、二歳兒の發達的特質を、精神生活の色々の面に分けて述べて見よう。

(一) 二歳兒以上の心理的發達については、大體保育要領に掲げられて

いる發達的特質の解説を主にして行き度いと思ふ)

1 運動の發達

既に一歳兒の所で述べたように、またいま右にも述べたように子供は二歳に達するまで全身の移動の能力を一通り身につけるようになってゐる。そこで二歳兒になると、轉ばないで走ることが出来るようになるのが普通である。そしてまわりのものに掴まらないで階段を昇つたり降りたりすることが出来るようになる。しかし、この年齢ではまだ右脚と左脚とを交互にふみ出して昇つたり降りたりすることは無理であつて、右脚で一段昇つたら左脚がこれについて一段昇つて同じ段に兩脚揃え、それから更に右脚をふみ出して、左脚がこれについて昇るといふ風に昇る。降りるときもこれと同じ降り方で降りて行くのである。しかし、とにかくこれだけ全身のこなしが身について來た譯である。身體全體のこなし工合が

進んで来たということについては、また、この年齢の子供が大きいボールをけることが出来るようになったということにもあらわれている。ボールをけるということは、大人から見れば何でもよいことのようにあるが、ボールの位置と脚の位置との關係をよく見計らつて脚を動かさないとどうまくけることが出来ない。こゝに身體のこなしが必要とされるのであるから、二歳児がボールをけるようになったというのも一つの發達の目じるしになるのである。

次に、手先きの細かな運動の發達について見よう。手先きの巧みさというものは、幼児に於ては發達が誠に遅々としていて、先ず不器用なものとされている。しかし、日常の生活を見てみるとよく觀察されるように、段々と器用さは身について来るようになってるのである。従つて二歳児に於ては積木を三個積み上げることが出来るようになっていて、紙を一枚づゝめくるといふことも出来るのが普通である。また鉛筆なりクレヨンなりを持たせて、垂直の線をひかせて見るとこれを模倣して引くことが出来るようになる。それから、スプーンを持つて食物をすくつて口の中に入れるということは、一歳半頃には大體出来るようになるのが普通の標準であるから、二歳児になるとスプーンの使い方はかなりうまくなつてゐる筈である。このようにして、手先きの細かな運動は、非常におそい歩みながら、次第に少しづゝ發達して行くのである。

2 知的發達

二歳児の知的發達に於て、特に眼立つことは、子供が自分の周囲の環境について色々な知識を身につけて來ることである。その現われは色々な點に現われて來るのであるが、先ず第一に、子供は自分のまわりにある始終見慣れたものの名前をいうことが出来るようになる。お茶碗、箸、下駄、足袋といふようなものの名前は、「ハチ」とか「カッコ」とかいうように片言が多いのではあるが、大體知つていて言えるのである。これは、前の一歳児の所で述べたように、一歳半過ぎると子供は物に一つ／＼名前があることを知り、色々なものの名前を盛に質問するようになるので、この結果が、二歳すぎた子供にはこのようにして現われて來るものであると考えられる。同じように、自分自身を含めた環境の認識ということに就いては、子供は二歳すぎると自分自身の性別が分るようになるので、自分が男の子であるか女の子であるかということがはつきり分るようになる。自分自身と周囲とを比較して、自分と同性的のものと異性的のもののあることが分り、自分の所屬する性のはつきり分るようになるのである。また二歳半すぎると子供は、自分の名前、それも姓を言うことが出来るようになる。これも、子供が、自分の屬している家族に特別の呼び名があることを認識するようになつた結果とにて現われて來ることなのであつて、廣い意味に於ける環境の認識といふことに關係するのである。

子供が繪を理解するようになるということは、一歳半過ぎに見られることを前に述べたが、二歳児に繪を見せると、その繪の中に在るものを一つ／＼列擧して、三つ以上は列擧することが出来る。たゞし、この頃に子供の理解する繪というのは、大きい幼児達の見て喜ぶ繪とは本質的に違つてゐる。子供が理解する繪というのは、子供達が現在までによく知つてゐるものの描かれてゐる繪に限られるだからいわゆるお話を繪にしたような繪本はこの年頃の子供には不向きである。子供が自分の周圍の世界に始終見ているようなものでなければ向かない。そして、その意味で、もう一つ大事なことは、繪が寫實的であることである。寫實的で輪廓がはっきりしたものでないと、子供には理解されない。子供は、自分の知つてゐるものが、そのままの姿で描かれてゐるのを見てそれを理解し喜ぶのである。それから、この時期は繪の中にあるものを個別的に列擧する時期であるから、一つ／＼のものが大きくはつきり描かれてゐることが必要であつて、澤山のものゝが非常に「チャ／＼」と描かれてあつたり、複雑な背景があつたりすることは無意味であつて必要はない。このような譯でこの時期は子供に與える繪本として最初の繪本の與えられる時期であるが、繪本として備うべき條件は、寫實的で、輪廓も色彩もはつきりしてゐて、個別的に描かれた繪であつて欲しいといふことになるが繪本を扱う子供の手先きの器用さから言つてまだ幼ない段階であるから、出来るならば丈夫な材料（厚い紙や布）で作られた繪本が欲しいものである。

次に、二歳児は、その繪の理解の所で述べたことでも既に分るが、丸とか四角とか三角といふような色々な形の形を充分に區別する能力を持つてゐる。また幼児は時間の觀念といふものが非常に貧しいのが普通であるが、二歳児に於ては、過去と現在との區別は充分に分るようになってゐる。「イック」といふことと、「イク」といふことは言葉の上ではつきり區別して言えるようになってゐる。この程度の時間の觀念はもう出来てゐるのが普通である。このことに關連して、子供達がこの年頃になればいわゆる觀念といふものを持つようになつてゐることはすばらしい發達である。二歳以前の子供は眼の前に見えているものは勿論充分に心の中につかんでゐる。然し、一見そのものが眼の前から姿を消すと忘れてしまふ。けれども、二歳児は眼の前にはないものの名前でもちやんと思ひ出して言うことが出来る。いわゆる觀念といふものが出来たのである。このことは、現在といふ世界の中に生きていた乳兒から、多少とも記憶による時間的な廣い世界——大げさに言へば過去といふものを持つてゐる廣い幼兒的な世界に生きようといふくらいか進歩して來た事を物語るものであると言えよう。しかし、この後に更に進展して行くにはまだ一層の發達を必要とする。このことはまた上の年齢の知的發達に就いて述べるときにふれることにしたいと思ふ。

3 情緒的發達

情緒の發達に於て、二歳児は非常に扱い難い時期に當つて

いる。情緒の中でもいわれる否定的情緒とか消極的情緒といわれてゐる部類の情緒が、眼立つて現われて来るからである。

先ず恐怖心についていうと、二歳という年齢は恐怖心の非常に強くなる年齢である。大膽恐怖という情が乳児のようないわゆるもの分らないうちにはそれ程強くないが、やゝ長じている／＼の事が分るようになって、しかもまだそれ程にまわりの世界のことがよくは分つていないという、いわば中途半ばの状態にあるとき恐れは強く現われて来るのである。

二歳から五歳頃までの間というのが、このような意味で恐怖心の一番強くなる時期であるが、二歳児はまさにこの時期の入口に當る所に在る譯である。そこで二歳児は、何か始めての新しい場面によつゝかると、殆どいつでも恐怖心を現わすのがよつうである。新しく保育所に入つた幼児などが中々なれないというのもその一つの現われであるし、始めての他所のうちに行つて玄關でしりぞみして中々入らないなど、いろいろその一つの現われである。この様子を示す事から推察出来るように、二歳児は非常に泣き易い。恐かつたり、一寸不安なことがあつたり、ちよつと不快なことがあつたりすると直ぐに泣き易いのである。また二歳児は少し氣に入らないことがあるとすぐに怒つてかんしゃくを起す。大體怒つたときの表現は二歳頃まではまるでめちやくちやだと云つてもいい位幼稚である。氣に入らないことがあると、すぐに大聲をあげて泣きわめく。ひとをひつかいたり、足ぶみしたり、

ひつくり返つたり、黙り込んだりするというような行動が現われて来るのである。このような行動はいわば感情の爆發をそのままにさらけ出したような無方向の無目的の行動であるから、めちやくちやであり、幼稚であるといつても可い。このような怒つたときのかんしゃくはまず二歳児に最も多く見られる典型的な行動である。それからもう一つ二歳児に殊によく現れて來易いものはしつと心である。多くの場合、しつと心は下に弟や妹の生れた時に現われて來るのが普通であるが、この弟や妹の生れて來るのは大體子供が満二歳頃が多いといふこともこれに關係してゐるだらう。しつと心について注意すべきことは、泣き虫になつたり、いやに甘つたれたり、おもしろしをしたりというやうな、いわば赤ちやんに逆もどりしたような行動が現われて來ることであつて、たゞ表面に現われたこのやうな行動にまどわされないのでその奥にひそんでゐるしつと心というものを見破るだけの洞察力を持つことが大事である。

情緒の現われに就いて見られる幼稚な傾向は、積極的情緒といわれる面にも觀察される。即ち、嬉しいとき、喜びを現わすのに、たゞ微笑や笑いをもつて現わすだけで、ことばで表現するといふやうなことを二歳児は未だしないのである。また、愛情といふ面に就いても、いわゆる受身の愛情即ち大人から受ける愛情に對して甘つたれるといふ氣持は持つて居るが、子供どうしの愛情といふものは二歳児にはまだ見られないのが普通である。

情緒の統御^{トウゴ}ということが二歳児にはまだ不充分だということとは、以上見た所によく現われていると思うが、一番はつきりとした現われは、おもしろしに現われていると言うことが出来よう。二歳児は、嬉しいときでも、恐いときでも、怒ったときでも、すべて激しい感情の興奮にとらわれたとき、ついても、おもしろしをすることがある。このことは二歳児に特有なことだと云つていゝだろう。

4 社會的發達

社會的發達という場合、社會人としての幼児の個人的な身のまわりの始末に關することの發達と、周囲の大人や子供との關係の間に織りなされるいわゆるほんとの社會生活の面の發達との二つの面が考えられる。

先ず、個人的な身のまわりの始末ということに就いて言えば、二歳児は既に運動の發達の所で述べたようにスプーンを自分で使えるので、自分で食事をするということを始めている。そして二歳半頃になれば片手にスプーン、片手に茶碗というように兩手を使うようになって來るのが普通である。また、二歳児は、簡単な身につけるものだから、ひっぱつて身につけることをするようになってゐる。例えばソックスだとか、指なし手袋等だつたら、自分でひっぱつて身につけられるようになってゐるのが普通である。

社會生活の面に於て、二歳児に眼立つことは、模倣の傾向が強く現われて來ることである。まわりの人のすることを何

でもまねる。だからこの年齢の幼児は、お掃除のまね、お茶碗洗いのまねというように、家の中で母親などのすることを見てそのまゝまねして遊ぶ傾向が強いのである。然し、この年頃ではまわりの人がやつてゐるのを見て、そのまゝまねするということをするのであつて、もう少し大きい子供のごつこ遊び程進んだものではない。このような大人との關係に於て、二歳児にもう一つめだつたことは、反抗期が始まるということである。二歳すぎると子供には、何か言われると「イヤ」という傾向が強い。これは子供の心に自我が成長して來たからである。成長しつゝある自我は外から壓迫されるとき必ず反撥する。この反撥が反抗なのである。反抗期は一面におだての利く時期でもある。自我が立てられれば満足するからである。反抗期はこのように自我の成長のめぐるしである。反抗期のないようなおとなしいといわれる子供はと大きく大きくなつてから意志の弱い人間になり易いと言われている。

二歳児に於ては、子供同志の社會生活というものはまだ充分に開けて來ない。子供が二三人位居ても、めい／＼が獨り遊びをしてゐるのが先ず普通の姿である。やゝ、友達との接觸に心の開けかけて來た子供に並行遊びが見られる位に止まつてゐる。並行遊びというのは、例えばお砂場で一人の子供がお園子作りをしてゐるとこれに刺戟されて他の子供もお園子作りをする。しかし作り始めると、めい／＼が勝手に作つてゐるだけでお互いの交渉はない。丁度並行線(八頁へつゞく)

る。また日常生活の習慣に就いての質問書による調査の結果に就いて見れば、歯磨、着衣、挨拶、食前の手洗い、就寝時間の規則性に於て保育児が優れて居り、偏食、洗顔、大便の習慣、夜尿癖に於て非保育児との間にさ程の差異が認められないという結果を示している。

性格的特性に就いての調査はかつて東京市保育會に於てなされたものがあるが、今その資料を手許に持たないので觸れることが出来ない。

以上の性格的發達に就いては、一面に於て知能及び知識の發達に於ける程、量的に表示する事が困難であることも關係して、未だ充分に研究されたものが少ないと言つていゝであらう。

五　む　す　び

以上、従來の保育效果に關する諸研究を概観して見ると、知能及び知識の發達に對しては促進的影響の存在が或る程度まで確かめられているが、性格的發達に對しては研究が至つて少ないという事を認めなければならぬ。そして、従來の諸研究に就いても、研究方法上の問題に残されたものが極めて多く、全體として言うならば保育效果の研究は、未だ充分に組織されていないと言つていゝであらう。しかも、今日程幼児保育の重要性が叫ばれる時期はないのであるが、一面に於て我が國のいままでの教育のすべてがさうで、つたように、幼児教育もまた科學的根據の獲得という點に於て必ずし

も充分でなかつたことを我々は反省しなければならぬ。將來幼児教育の前進の爲に、我々はその科學的基礎づけに努力を拂わなければならないが、保育效果に關する研究はその中で重要な意見を持つものであることを我々は認識すべきである。

此の稿は昨年十一月の第一回日本保育學會で發表される豫定であつたものゝ梗概である。時間の都合上取り止められたので特に乞うて本誌に掲げ。

(三一頁より)

見たいなもので、ただその遊びの始まるキッカケが他の子供の存在という所に在るだけだというような、この種の遊びをいうのである。いわば、社會的な遊びの最も原始的な形のものが二歳児に於て、ようやく始まりかけて來て居るといふ所なのである。このようにして、二歳児の子供同志の社會生活というものは、まだ本格的な社會生活の入口の所に在るといふことが出來よう。

5　二歳児の發達的特質

二歳児の主な精神生活の部面に就いて一通り述べて來たが、最初に述べた走りまわる子供という表現に含まれているように、或る程度の基礎が出來て、これがまさに開こうとする状態、開きかけた状態というのが、二歳児の大きな特質と言へるようである。